

中国語“自己（ziji）”
と日本語「自分」の第二言語習得比較研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 翟, 勇 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027259

中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」の第二言語習得比較研究

翟 勇 (静岡大学 大学教育センター)

要約：中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」は中国語教育と日本語教育において習得が難しい語彙項目として挙げられてはいない。しかし、中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」は再帰代名詞として、学習者が“自己 (ziji)”と「自分」の先行詞指向について理解していないと、“自己 (ziji)”と「自分」を習得したとは言えない。本研究では、日本語母語話者中国語学習者と中国語母語話者日本語学習者を対象にアンケート調査を行い、中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」の第二言語習得を考察した。調査結果から、中国語“自己 (ziji)”が日本語「自分」より習得が困難であるという結果が得られた。中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」の先行詞指向が同じ傾向を持っているが、もし第二言語習得において母語の影響を受けるならば、中国語“自己 (ziji)”の習得も日本語「自分」の習得も両方ともに容易になるはずである。なぜ中国語“自己 (ziji)”の習得が難しいのかについて、中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」の相違点と語源を調べ、習得の差の生じる理由を明らかにした。

キーワード：中国語“自己 (ziji)”、日本語「自分」、再帰代名詞、第二言語習得、母語転移

はじめに

中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」についての語彙学習は初級レベルの早い段階に現れ、中国語“自己 (ziji)”は日本語の「自分」の意味として、日本語の「自分」は中国語“自己 (ziji)”の意味として示されている。中国語教育と日本語教育において、中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」の習得は特に注目されていなかった。Chomsky (1981) が束縛原理 (Binding Theory) を提案した後、中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」の先行詞指向が議論されるべき課題となり、習得に関する研究も現れ始めた。下記の (1) と (2) をみてみよう。

(1) 张三认为李四相信自己。(2)は日本語訳)

(2) 張三は李四が自分を信用していると思っている。

日本語母語話者中国語学習者に (1) の文、中国語母語話者日本語学習者に (2) の文を読ませ、(1) の“自己 (ziji)”と (2) の「自分」の先行詞指向について質問したところ、正しく答えられた学習者はそれほど多くなかった。中国語教育と日本語教育において、指導側が中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」の先行詞指向について学習者に何も説明していないのが現状である。中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」は再帰代名詞なので、その先行詞指向が分からなければ、中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」を習得したとは言えない。本研究では、中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」の先行詞指向のアンケート調査を行い、習得の難易度の差を比較分析し、その難易度の差を生じる原因を探ってみた。

1 中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」の先行詞指向

Chomsky (1981) が提案した束縛原理 (3) は普遍文法を構成する下位理論の一つである。照応形 (anaphor)、代名詞類 (pronominal)、およびそれ以外の名詞句である指示表現 (R-expressing) に関して、どの領域に先行詞があるべきかを規定している。(原口・中村 1996: 55)

(3) 束縛原理 (Binding Principle)

- (A) 照応形は、その統率範疇の内部で束縛されていなければならない。
- (B) 代名詞は、その統率範疇の内部で自由でなければならない。
- (C) 指示表現は自由でなければならない。

- (4) a. John said that [Tom_i criticized himself_i].
b. John_i said that [Tom criticized him_i].
c. John said that [Tom criticized Mary].

(4) の [Tom criticized . . .] は統率範疇 (governing category) である。(4a) の照応形 himself は統率範疇内の Tom と同一指標を持つことができるが、統率範疇外の John と同一指標を持つことができない。一方、(4b) の代名詞 him は統率範疇内の Tom と同一指標を持つことができないが、統率範疇外の John と同一指標を持つことができる。(4c) の指示表現 Mary は自由で、Tom, John と束縛関係になっていない。

中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」に関わる原理は束縛原理 A である。下記は中国語“自己 (ziji)”、日本語「自分」と英語の himself の例である。

- (5) 张三_i 认为 [李四_j 相信 自己_{ij}]。((1) 再掲)
- (6) 张三_i は [李四_j が 自分_{ij} を 信用している] と思っている。((2) 再掲)
- (7) Zhangsan_i thinks [Lisi_j trusts himself_{*ij}].
- (8) 张三_i 给了 李四_j 一张 自己_{i*j} 的 照片。
- (9) 张三_i は 李四_j に 自己_{i*j} の 写真を あげた。
- (10) Zhangsan_i gave Lisi_j a photograph of himself_{ij}.

Chomsky が提案した束縛原理は主に英語に基づいた分析である。Chomsky は束縛原理が普遍文法であり、すべての言語に適用すると考えている。しかし、(5) と (6) で示したように、中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」は Chomsky が提案された束縛原理 A に違反し、節内での束縛 (局所的束縛) と節を超えた束縛 (長距離束縛) の両方を許すものと考えられている。(8)–(10) の二重目的語構文において、英語の場合は主語と目的語が両方を himself の先行詞として可能であるが、中国語と日本語の場合は主語のみが“自己 (ziji)”と「自分」の先行詞になることができる。中国語、日本語、英語再帰代名詞の先行詞指向をまとめると、下記の表 1 のようになる。

表1 中国語“自己 (ziji)”・日本語「自分」・英語“himself”の先行詞指向

	埋め込み文		二重目的語構文	
	短距離主語	長距離主語	主語	目的語
中国語“自己 ziji”	○	○	○	×
日本語「自分」	○	○	○	×
英語“himself”	○	×	○	○

表1から、中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」は同じ先行詞指向を示している。第二言語習得において母語の影響、つまり母語の正転移を受けるならば、日本語母語話者中国語学習が簡単に中国語“自己 (ziji)”の先行詞指向を習得できると予測し、同じく中国語母語話者日本語学習者も簡単に日本語「自分」の先行詞指向を習得できると予測する。

再帰代名詞第二言語習得についての先行研究は主に英語再帰代名詞の習得の研究が多く、中国語と日本語再帰代名詞第二言語習得の研究は少ない傾向にあり、両者の比較研究はなかった。本研究では、中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」の先行詞指向の調査を行い、以下の三つの問題の解決を目指した。

- ① 中国語“自己 (ziji)”の先行詞指向は日本語「自分」と同じ傾向を示しているため、日本語母語の影響により、日本語母語話者中国語学習者は容易に中国語“自己 (ziji)”の先行詞指向を習得できるのか。
- ② 同じく日本語「自分」の先行詞指向は中国語“自己 (ziji)”と同じ傾向を示しているため、中国語母語の影響により、中国語母語話者日本語学習者は容易に日本語「自分」の先行詞指向を習得できるのか。
- ③ もし両者の習得において難易度の差が生じる場合、その理由は何か。

2 先行研究

Tomas (1991) は日本語母語話者英語学習者とスペイン語母語話者英語学習者を対象に、英語再帰代名詞の習得について調査した。それぞれ母語が異なる二組の調査対象者が、英語再帰代名詞の習得において似た傾向を示したという結果を得た。この結果から Tomas (1991) は母語が第二言語習得には影響しないと主張した。さらに、Tomas (1995) は中国語母語話者日本語学習者、韓国語母語話者日本語学習者、タイ語母語話者日本語学習者と英語母語話者日本語学習者を対象に、日本語「自分」の習得についても調査した。Tomas (1991) の結果と同様に、それぞれ母語が異なる調査対象者が、日本語再帰代名詞の習得において似た傾向を示した。Tomas (1995) は母語が第二言語習得に影響しないという結果が得られ、Tomas (1991) の結果を支持している。

一方、Yuan (1998) は英語母語話者中国語学習者と日本語母語話者中国語学習者を対象に中国語“自己 (ziji)”の習得を調査した。日本語母語話者中国語学習者が英語母語話者中国語学習者より容易に中国語“自己 (ziji)”を習得するという結果が得られた。中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」は同じ先行詞指向を示しているが、その一方で、英語再帰代名詞とは異なる先行詞指向である。よって、母語が第二言語習得に影響すると主張した。曾 (2012) は英語母語話者中国語学習者を対象に、中国語“自己 (ziji)”と

“他自己 (taziji) (彼自身)” の習得について調査を行った。英語再帰代名詞の先行詞指向と一致している中国語“他自己 (taziji)” の習得は容易だが、英語再帰代名詞の先行詞指向と一致していない中国語“自己 (ziji)” の習得は難しいという結果を得た。曾 (2012) は母語の転移により中国語“他自己 (taziji)” の習得を促進し、一方、母語の干渉により中国語“自己 (ziji)” の習得を阻害したと主張した。

再帰代名詞第二言語習得の先行研究において、母語の影響を受けると母語の影響を受けないという二つの対立した調査結果があった。本研究では、日本語母語話者中国語学習者と中国語母語話者日本語学習者を対象に、中国語“自己 (ziji)” と日本語「自分」の習得を調査し、母語の影響を受けるかどうかを検証し、その理由を解明するのを目指すことにした。

3 日本語母語話者中国語学習者を対象に中国語“自己 (ziji)” の第二言語習得調査

3.1 調査文

調査文を作成する際には、初級学習者を配慮し、簡単な調査文内容にし、かつピンインを付けたものを作成した。実際の調査文は下記のとおりである。

(11) 句型 1：“自己 ziji” 埋め込み文

zhāngsān juéde lǐsì duìzìjǐ méixìnxīn
 张三 觉得 李四 对自己 没信心。

“自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“张三”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“李四”?	[A]	[B]	[C]	[D]

(12) 句型 2：“自己 ziji” 二重目的語構文

zhāngsān gěi lǐsì kànle zìjǐ de zhàopiàn
 张三 给 李四 看了 自己的 照片。

“自己”可以指

	肯定可以	大概可以	大概不可以	肯定不可以
“张三”?	[A]	[B]	[C]	[D]
“李四”?	[A]	[B]	[C]	[D]

(11) は中国語“自己 (ziji)”を含む埋め込み文で、質問が二つある。一つは“自己 (ziji)”は長距離主語“张三”を指すことができるかという問いであり、回答者に「絶対できる」は [A]、「たぶんできる」は [B]、「たぶんできない」は [C]、「絶対できない」は [D] の一つを選択してもらおう。もう一つの質問は“自己 (ziji)”は短距離主語“李四”を指すことができるかという問いであり、同じ基準で回答者に [A]、[B]、[C]、[D] から一つ選択してもらおう。(12) は中国語“自己 (ziji)”を含む二重目的語構文で、質問が二つある。一つは“自己 (ziji)”は主語“张三”を指すことができるか、もう一つは“自己 (ziji)”は目的語“李四”を指すことができるかについて、回答者に [A]、[B]、[C]、[D] から一つの回答を選択してもらおう。(11)、(12) のような文を 8 文、“他自己 (taziji) (彼自身)”を含む文を 8 文、ダミー文を 8 文、合計 24 文を用意した。各文はランダムに提示した。

協力者は日本語母語話者中国語初級学習者 27 名（中国語学習歴 1-2 年）と、日本語母語話者中国語中級学習者 15 名（中国語学習歴 3-4 年）と、日本語母語話者中国語上級学習者 16 名（中国語学習歴 4

年以上)である。コントロールとして中国語母語話者 31 名に対しても調査を行った。各協力者には謝礼金を払った。

3.2 結果と分析

「肯定可以」(絶対できる)の回答は3、「大概可以」(たぶんできる)の回答は2、「大概不可以」(たぶんできない)の回答は1、「肯定不可以」(絶対できない)の回答は0で記入し、Tukey 多重統計を行った。3は絶対に中国語“自己 (ziji)”の先行詞になれることを示し、0は絶対に中国語“自己 (ziji)”の先行詞になれないことを示している。

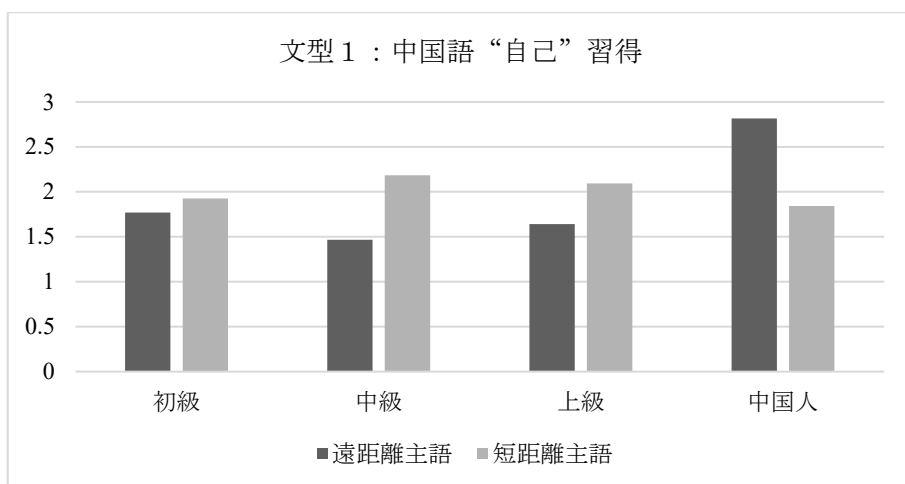


図1 中国語“自己 (ziji)”埋め込み文習得

図1は日本語母語話者中国語学習者初級・中級・上級と中国人による“自己 (ziji)”を含む埋め込み文先行詞指向についての調査結果である。黒色の棒グラフが示しているのは遠距離主語(統率範疇を超えた節外の主語)が“自己 (ziji)”の先行詞として選ばれた結果であり、灰色の棒グラフが示しているのは短距離主語(統率範疇内の主語)が“自己 (ziji)”の先行詞として選ばれた結果である。埋め込み文において、中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」の先行詞指向は、統率範疇内の主語と統率範疇を超えた節外の主語、その両方を許すのである。日本語母語話者中国語学習者が中国語“自己 (ziji)”を学習する際に、教科書には“自己 (ziji)”が日本語「自分」に訳され、もし母語日本語「自分」の先行詞指向の影響を受けるならば、初級・中級・上級レベルの中国語学習者が遠距離主語と短距離主語の両方を中国語“自己 (ziji)”の先行詞として受け入れるはずである。

図1の中国人のデータから、中国人が遠距離主語と短距離主語の両方を受け入れ、かつ、遠距離主語のほうが短距離主語より“自己 (ziji)”の先行詞として受け入れやすいという結果を得た。短距離主語の選択において、各グループでは有意差は観察されなかった。しかし、遠距離主語の選択において、日本語母語話者中国語学習者の初級・中級・上級レベル学習者がいずれも中国人の間に有意差が観察された ($p < 0.5$)。つまり、日本語母語話者中国語学習者は中国語が未熟な初級レベルから中国語が上達している上級レベルまで、“自己 (ziji)”の長距離指向に対して容認度が低いということが分かった。これにより、中国語“自己 (ziji)”の長距離指向の習得は日本語母語話者中国語学習者にとって非常に難しいと考えられる。よって、図1の結果から、日本語母語話者中国語学習者が中国語“自己 (ziji)”を習得しているとは言え

ない。また、もし母語日本語「自分」の先行詞指向の影響を受けるならば、中国語“自己 (ziji)”の長距離指向を受け入れるはずである。中国語“自己 (ziji)”の長距離指向に対して容認度が低いということから、日本語母語話者中国語学習者が中国語“自己 (ziji)”を含む埋め込み文の先行詞を判断する際に、日本語「自分」からの影響を受けていないということが示唆された。

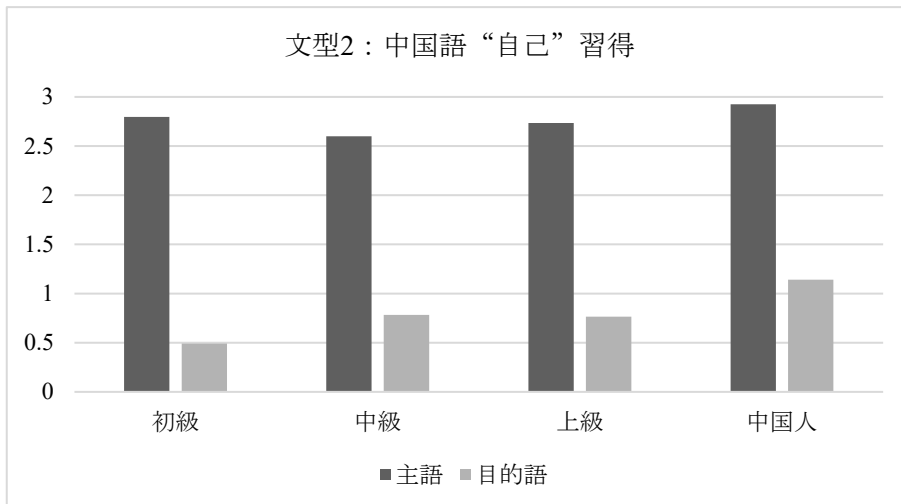


図2 中国語“自己 (ziji)”二重目的語構文習得

図2は日本語母語話者中国語学習者初級・中級・上級と中国人による“自己 (ziji)”を含む二重目的語構文先行詞指向の結果である。黒色の棒グラフが示しているのは調査文の主語が“自己 (ziji)”の先行詞として選ばれた結果であり、灰色の棒グラフが示しているのは調査文の目的語が“自己 (ziji)”の先行詞として選ばれた結果である。文型2では、文の主語が“自己 (ziji)”の先行詞とすることが可能であるのに対し、文の目的語が“自己 (ziji)”の先行詞とすることができない。そのことは図2に示された中国人の調査結果と一致している。日本語の「自分」は中国語“自己 (ziji)”と類似し、二重目的語構文において、文の主語が「自分」の先行詞になることが可能であるが、文の目的語が先行詞になることはできない。日本語母語話者中国語学習者が二重目的語構文中国語“自己 (ziji)”を習得する際に、母語日本語「自分」の転移により中国語“自己 (ziji)”の先行詞を理解するならば、中国語“自己 (ziji)”の習得が難しくないと予測できる。

図2の結果から、日本語母語話者中国語学習者が初級・中級・上級の各レベルにおいて、主語の先行詞選択とコントロール中国人組の間に有意差は観察されなかった。そのことから、日本語母語話者中国語学習者初級レベルから正しく中国語“自己 (ziji)”の先行詞を選択したと言える。よって、中国語“自己 (ziji)”二重目的語構文の場合には、母語日本語「自分」の転移が観察されたと言えよう。

3.3 考察

中国語“自己 (ziji)”の習得について、図1の中国語“自己 (ziji)”を含む埋め込み文の結果から、母語日本語「自分」の転移は観察されなかったが、一方、図2の中国語“自己 (ziji)”を含む二重目的語構文の結果から、母語日本語「自分」の転移が観察された。母語の転移があれば、二つの文型ともに同じ結果が観察されるはずなのに、この二つの完全に矛盾した結果から、母語の転移ではなく、他の要因が影響

していると思われる。

心理言語学の文理解実験において、解析器 (parser) が文を理解する際に、最も近いフィラーの方略 (the most recent filler) や主題役割優先方略などの方略がよく使われている。日本語母語話者中国語学習者が中国語“自己 (ziji)”の先行詞を理解する際に、文理解実験と同じ方略を使う可能性があると考えられる。つまり、中国語“自己 (ziji)”に一番近い先行詞が中国語“自己 (ziji)”の先行詞として好まれているかもしれない。また、主題階層 (thematic hierarchy) により、動作主 (agent) と経験者 (experiencer) が優先的に中国語“自己 (ziji)”の先行詞として好まれているかもしれない。図1と図2の結果から、日本語母語話者中国語学習者は中国語“自己 (ziji)”に「一番近い主語」が“自己 (ziji)”の先行詞として選ばれたことが分かった。「一番近い」というのは知覚の方略 (例、最も近いフィラーの方略) によるものであり、「主語」が優先的というものは主題役割優先方略によるものである。「一番近い主語」というのは日本語母語話者中国語学習者が中国語“自己 (ziji)”の先行詞を理解する際に、この二つの方略を同時に使っているということになる。

日本語母語話者中国語学習者が上級レベルの場合でも、最も近いフィラーの方略や主題役割優先方略などの方略を用いて中国語“自己 (ziji)”の先行詞を判断するという事は、中国語“自己 (ziji)”について正しく習得していないことが考えられる。つまり、中国語“自己 (ziji)”の習得は予測と異なり日本語母語話者中国語学習者にとって習得し難いということが分かった。

4 中国語母語話者日本語学習者を対象に日本語「自分」の第二言語習得調査

表1から日本語「自分」と中国語“自己 (ziji)”は先行詞指向が一致し、日本語母語話者中国語学習者が中国語“自己 (ziji)”を習得する際に日本語「自分」の先行詞指向の影響を受けるのならば、中国語“自己 (ziji)”を簡単に習得できると予測した。しかし、日本語母語話者中国語学習者を対象に行った中国語“自己 (ziji)”の習得調査の結果から、母語日本語からの影響は観察されなかった。日本語母語話者中国語学習者が最も近いフィラーの方略や主題役割優先方略のような方略を用いて中国語“自己 (ziji)”の先行詞を理解するという結果を得た。中国語“自己 (ziji)”の習得は日本語母語話者中国語学習者にとって容易ではないということが分かった。

この章では、中国語母語話者日本語学習者が日本語「自分」の習得において母語中国語“自己 (ziji)”の影響を受けるかどうかを調査する。

4.1 調査文

日本語「自分」習得の調査文は中国語“自己 (ziji)”習得の調査文と同じように初級学習者を配慮し、簡単な調査文かつ振り仮名を付けた。実際の調査文は下記のとおりである。

(13) 文型1: 「自分」埋め込み文

さくらは けんが 自分に 自信がない と思っている。

「自分」は誰を指すことができますか？

絶対そうだ(100%) たぶんそうだ たぶんちがう 絶対ちがう(0%)

「さくら」である可能性は [A] [B] [C] [D]

「けん」である可能性は [A] [B] [C] [D]

(14) 文型 2 : 「自分」 二重目的語構文

さくらは はなこに 自分の写真を 送った。

「自分」は誰を指すことができますか？

	絶対そうだ(100%)	たぶんそうだ	たぶんちがう	絶対ちがう(0%)
「さくら」である可能性は	[A]	[B]	[C]	[D]
「はなこ」である可能性は	[A]	[B]	[C]	[D]

(13) は日本語「自分」を含む埋め込み文で、質問が二つある。一つは「自分」は長距離主語「さくら」を指すことができるかという問いについて、「絶対そうだ」は [A]、「たぶんそうだ」は [B]、「たぶんちがう」は [C]、「絶対ちがう」は [D] を回答として一つ選択してもらおう。もう一つの質問は「自分」は短距離主語「けん」を指すことができるかという問いについて、同じ基準で [A]、[B]、[C]、[D] から回答を一つ選択してもらおう。(14) は日本語「自分」を含む二重目的語構文で、質問が二つある。一つは「自分」は主語「さくら」を指すことができるか、もう一つは「自分」は目的語「はなこ」を指すことができるか、[A]、[B]、[C]、[D] から回答を一つ選択してもらおう。(13)、(14) のような文を 8 文、「彼自身」を含む文を 8 文、ダミー文を 8 文、合計 24 文を用意し、ランダムに文を提示した。

協力者は中国語母語話者日本語初級学習者 20 名（日本語学習歴 1-2 年）と、中国語母語話者日本語中級学習者 20 名（中国語学習歴 3-4 年）と、中国語母語話者日本語上級学習者 12 名（中国語学習歴 4 年以上）である。コントロールとして日本語母語話者 42 名に対しても調査を行った。各協力者に謝礼金を払った。

4.2 結果と分析

「絶対そうだ」の回答は 3、「たぶんそうだ」の回答は 2、「たぶんちがう」の回答は 1、「絶対ちがう」の回答は 0 で記入し、Tukey 多重統計をした。3 は絶対に日本語「自分」の先行詞になれるという回答の数字で、0 は絶対に日本語「自分」の先行詞になれないという回答の数字である。

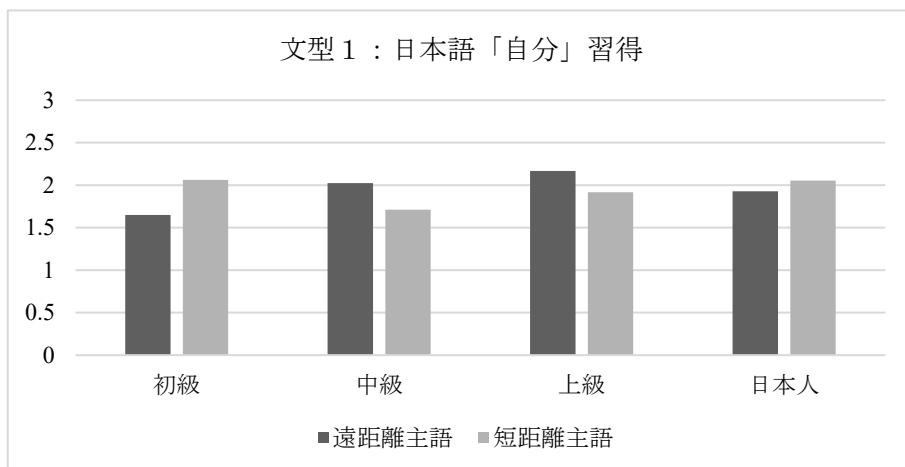


図 3 日本語「自分」埋め込み文習得

図3は中国語母語話者日本語学習者初級・中級・上級と日本人による日本語「自分」を含む埋め込み文先行詞選択の結果である。黒色の棒グラフが示しているのは各グループが遠距離主語（統率範疇を超えた節外の主語）を選択した結果であり、灰色の棒グラフが示しているのは短距離主語（統率範疇内の主語）を選択した結果である。日本語「自分」を含む埋め込み文の場合、遠距離主語と短距離主語がともに「自分」の先行詞となることが可能である。中国語“自己 (ziji)”の先行詞指向は日本語「自分」と同じであるため、もし母語の転移があれば、中国語母語話者日本語学習者が簡単に日本語「自分」を習得できると予測する。

図3では短距離主語の選択において各グループの間に有意差が観察されなかった。遠距離主語の選択において、中国語母語話者日本語学習者初級レベルと上級レベルの間、初級レベルと日本人組の間に有意差が観察され ($p < 0.5$)、上級レベルと日本人組の間には観察されなかった。もし中国語母語話者日本語学習者が母語中国語“自己 (ziji)”の転移により日本語「自分」の先行詞を判断しているのならば、初級レベルの学習者でも遠距離主語を選択するはずである。しかし、初級レベル学習者の遠距離主語選択が少なかったことから、母語中国語“自己 (ziji)”の転移はないということになる。日本語学習レベルが上がるとつれ遠距離主語を選択するようになるということは、日本語「自分」を習得していくということが言えるだろう。

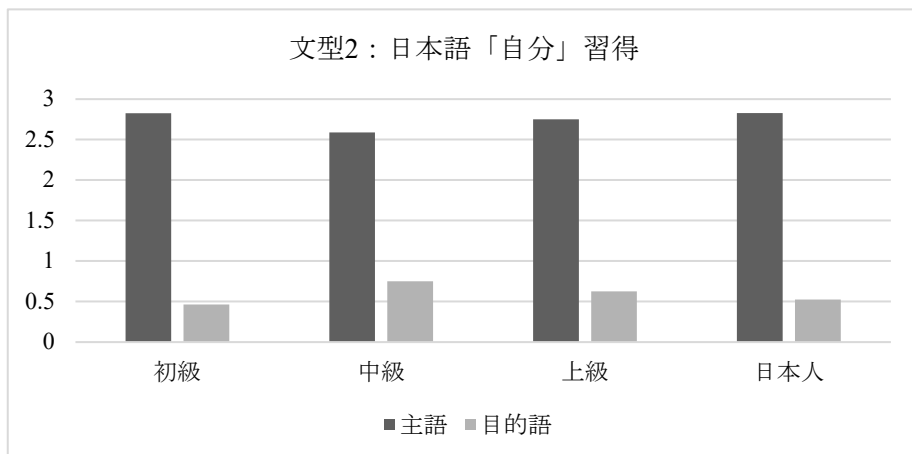


図4 日本語「自分」二重目的語構文習得

図4は中国語母語話者日本語学習者初級・中級・上級と日本人による日本語「自分」を含む二重目的語構文先行詞選択の結果である。黒色の棒グラフが示しているのは各グループが文の主語を「自分」の先行詞として選択された結果であり、灰色の棒グラフが示しているのは文の目的語を「自分」の先行詞として選択された結果である。日本語「自分」を含む二重目的語構文において、文の主語を「自分」の先行詞として解釈するのが妥当であるが、目的語を「自分」の先行詞として解釈するのが適切ではない。中国語“自己 (ziji)”を含む二重目的語構文における“自己 (ziji)”の先行詞指向は日本語「自分」の先行詞指向と同じなので、母語中国語の転移により日本語「自分」の先行詞を選択する場合、文の主語が選ばれる可能性が高いと予測する。

図4の結果はその予測が正しいことを裏付けている。中国語母語話者日本語学習者が各レベルにおいて「自分」の先行詞として文の主語を選ぶ傾向があるということが明らかである。つまり、母語中国語

“自己 (ziji)” の転移が観察されたとと言える。

4.3 考察

日本語母語話者中国語学習者による中国語“自己 (ziji)” 習得の調査結果と同じ、中国語母語話者日本語学習者による日本語「自分」の習得においても、図 3 の結果から中国語母語の転移が観察されなかったが、一方、図 4 の結果から中国語母語の転移が観察された。3.3 節に述べたように、母語の転移があれば、二つの文型ともに同じ結果が観察されるはずなのに、この二つの完全に矛盾した結果から、母語の転移ではなく、他の要因が影響していると思われる。

3.3 節では最も近いフィラーの方略や主題役割優先方略を述べたが、これらの方略は解析器が言語的知識の使用が不可能なときに使う文理解方略だと知られている。図 3 と図 4 の中国語母語話者日本語学習者初級レベルの結果について、最も近いフィラーの方略や主題役割優先方略を用いて解釈することができる。初級レベルの段階では、学習者が日本語「自分」をよく理解できず、「自分」の先行詞を判断する際に、「一番近い主語」(図 3 では初級レベル灰色柱、図 4 では初級レベル黒色柱) という最も近いフィラーの方略や主題役割優先方略を用いて「自分」の先行詞を選んだと言える。中国語母語話者日本語学習者が学習レベルの上達につれ、日本語「自分」を理解できるようになり、日本人と同じように「自分」の先行詞を判断するようになる。よって、中国語母語話者日本語学習者の場合、学習レベルが上がるにつれ、日本語「自分」を習得し、最終的に日本人と同じように「自分」を理解するようになるということが分かった。

5 中国語“自己 (ziji)” と日本語「自分」の習得比較

日本語母語話者中国語学習者による中国語“自己 (ziji)” 習得調査と中国語母語話者日本語学習者による日本語「自分」習得調査の結果から、以下の 2 点を明らかにした。

- ① 中国語“自己 (ziji)” と日本語「自分」の習得において、母語の転移は観察されなかった。
- ② 中国語“自己 (ziji)” の習得においては、日本語母語話者中国語学習者が上級レベルでも中国語“自己 (ziji)” の先行詞指向を理解しなかったことから、中国語“自己 (ziji)” の習得が容易ではないということが分かった。これに対して、日本語「自分」の習得においては、中国語母語話者日本語学習者がレベルの上がるにつれ日本語「自分」が理解できるようになり、日本語「自分」の習得は比較的容易であるということが言える。つまり、中国語“自己 (ziji)” と日本語「自分」の先行詞指向が一致しているにもかかわらず、中国語“自己 (ziji)” の習得が日本語「自分」より難しいという結果が得られた。

5.1 中国語“自己 (ziji)” と日本語「自分」の比較

中国語“自己 (ziji)” と日本語「自分」の習得調査から、中国語“自己 (ziji)” のほうが日本語「自分」より習得し難いという結果が分かった。中国語“自己 (ziji)” と日本語「自分」は先行詞指向が一致しているにもかかわらず、なぜ習得の難易度に差が生じたのかということを考える必要がある。次の節では両表現の文法上の差異と語源から、中国語“自己 (ziji)” と日本語「自分」を比較し、習得の難易度の差の原因を探る。

5.1.1 中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」の類似点

中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」は下記のような類似点を持っている。①と②に使われている例((15)-(18))は本調査で使われた調査文である。

① 長距離束縛 (long distance binding)

中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」は Chomsky が提案した束縛原理 A に違反し、節内での束縛(局所的束縛)と節を超えた束縛(長距離束縛)の両方を指すことが可能である。

(15) 张三_i 觉得 [李四_j 对自己_{ij} 没信心]。((11) 再掲)

(16) 太郎_iは [花子_jが自分_{ij}を信用していない] と思っている。

(15) における“自己 (ziji)”の先行詞は節内の主語“李四”と節を超えた節外の主語“张三”の両方を指すことが可能である。(16) における「自分」の先行詞も同様に、節内の主語「花子」と節を超えた節外の主語「太郎」の両方を指すことが可能である。

② 主語指向性 (subject orientation)

中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」は主語を先行詞とすることが可能であるが、目的語を先行詞とすることができない。

(17) 张三_i 给了 李四_j 一张 自己_{i*j} 的 照片。

(18) 太郎_iは 花子_jに 自己_{i*j}の写真を あげた。

(17) の“自己 (ziji)”と (18) の「自分」の先行詞はそれぞれ文の主語“张三”と「太郎」を指すことは可能であるが、目的語“李四”と「花子」を指すことができない。

③ 次統制束縛 (sub-command binding)

吉永 (2005) は (19) と (20) の例を挙げ、主語指向性に違反すると指摘した。主語“汽车”と「車」は“自己 (ziji)”と「自分」の先行詞になることができないからである。

(19) 我_i 知道 [张三_j 的 汽车] 被 自己_{ij} 的 朋友 弄坏了。

(20) 私_iは [太郎_jの車]は 自己_{ij}の友人に壊されたと知っている。

“自己 (ziji)”と「自分」の先行詞は有生名詞でなければならないため、(19)と(20)における“自己 (ziji)”と「自分」の先行詞は“汽车”と「車」ではなく、次統御する“张三”と「太郎」である。

5.1.2 中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」の相違点

中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」は先行詞指向において類似点が多い。一方、両者は以下の相違

点がある。

① 阻止効果 (blocking effect)

(21) は例 (15) の統率範疇内の主語“李四”が第一人称代名詞と第二人称代名詞“我/你”に変わる文である。その場合、“自己 (ziji)”は統率範疇を超えた節外の主語“张三”を指すことが阻まれ、このことは阻止効果 (blocking effect)と呼ばれている。しかし、日本語の場合、例 (16) の統率範疇内の主語「花子」が第一人称代名詞と第二人称代名詞「僕/君」に変わった (22) の文では、「自分」の長距離束縛が阻止されず、統率範疇を超えた節外的主語「太郎」が「自分」と同一指標を持つことができる。つまり、中国語“自己 (ziji)”は阻止効果が観察されたが、日本語「自分」は阻止効果がない。

(21) 张三_i 觉得 [我/你_j 对 自己_{*ij} 没信心]。

(22) 太郎_iは [僕/君_jが 自分_{ij}を 信用していない] と思っている。

② 共起する動詞の違い

生成文法では、ある述語 (predicate) が、その語彙特性として項 (argument) をいくつ必要とし、また、それぞれの項がどのような主題役 (θ-role) を担うかを、語彙目録 (lexicon) で指定されている。たとえば、動詞 put は、主題役動作主 (agent) を担う項を外項 (external argument) (主語となる項) として選択し、主題 (theme)、場所 (location) を担う二つの項を内項 (internal argument) (補部 (complement) となる項) として選択する。照応形と関係ある動詞は二項動詞と三項動詞である。

翟 (2019) は「语料库在线のコーパス」調査と《汉语动词用法字典》の調査に基づき、中国語“自己 (ziji)”と共起できる動詞を双方向の動詞と単方向の動詞に分けている。単方向の動詞は他方指向動詞と自我指向動詞に分けている。たとえば、“相信” (信じる) は双方向動詞であり、語彙の指向は他の人でもいいし、自分を指してもいい。その他、“责备” (責める)、“喜欢” (好きだ) などの語彙が挙げられる。“讨好” (歓心を買う) は単方向動詞の他方指向動詞であり、語彙の指向は他の人のみで、自分を指すことができない。例として“救” (救う)、“抱怨” (文句を言う)、“怕” (恐れる) などが挙げられる。“卖弄” (自慢する) は単方向動詞の自我指向動詞であり、語彙の指向は他の人ではなく、自分しか指すことができない。例として“炫耀” (誇示する) などが挙げられる。

日本語の「自分」について、書き言葉均衡コーパス (コーパス開発センター) により、照応表現を表す「自分」と共起する動詞を調べた結果、「自分」と共起する動詞の数は少なく、「驚く」、「思う」、「喜ぶ」、「信じる」などのような心理動詞であることがわかった。久野 (1973; 194) が「再帰形の先行詞の指示対象である人は『自分』を含む節の内容を意識していなければならない」という「有意識条件 (Awareness Condition)」を提案した。

(23) a. 先生が自分_iをほめた時、タカシ_iはひどく驚いた。

b. *先生が自分_iをほめた時、タカシ_iはぐっすり眠っていた。

(23a)ではタカシが「先生が僕をほめた」のを意識するからこそ「驚いた」ので、この場合、「有意識条件」に合うから、「自分」とタカシが同一指標になることができる。これに対して、(23b)ではタカシが「眠

っていた」ので「先生が僕をほめた」のを意識しないため、「有意識条件」に合わないことにより、「自分」とタカシが同一指標になることは不可能である。

吉永 (2005) は、「自分」の視点の主体が Experiencer などの心理的・内省的要素を含意していることが、文法的に許容されることと深く関係していると述べている。

- (24) a. 自分_iも試合に参加できたことが彼_jに大きな喜びを与えた。
b. ??自分_iも新企画に参加できたことが彼_jに高収入と高い地位を与えた。

(24a)の「彼」は目的語であるにも関わらず、喜びを享受する心理的な主体として「自分」の視点となるが、(24b)のような動作的な内容の文に替えると視点が確保できず容認性が落ちるのである。

以上から、日本語「自分」の照応形用法と共起する動詞は心理動詞、抽象的な動詞であり、中国語“自己 (ziji)”の照応形用法と共起する動詞は心理動詞、抽象的な動詞に限らず、具体的な動詞もあるということがわかった。

③ 語源の違い

程 (1999)、董 (2002)、丁 (2007)、金 (2014)の研究によると、中国語の“自己 (ziji)”は純粋な再帰代名詞ではなく、古代漢語で再帰用法を持っていた“自 (zi)”と代名詞用法を持っていた“己 (ji)”から合成した複合語である。“自 (zi)”は照応形の働きを持ち、“己 (ji)”は代名詞の働きを持ち、両者の複合により“自己 (ziji)”は照応形と代名詞の特徴を両方持っている。Chomsky が提案した束縛原理 A に違反している下記の (25)の例について、“自 (zi)”は照応形の働きを持っているから、統率範疇内の主語“李四”と同一指標を持つことができ、“己 (ji)”は代名詞の働きを持っているから、統率範疇外の主語“张三”と同一指標を持つことができる。

- (25) 张三_i觉得 [李四_j对自己_{ij}没信心]。((11), (15) 再掲)

金 (2014)の研究によると、日本語の「自分」は和製漢語で、室町時代から用例が見られる。「自分」の「分」は、自らの置かれた境遇というような意味に用い、そして「自らの分」ということが熟して和製の語「自分」が成立したとされている。「自分」の成立の過程において「内的自己」という意味を持つようになり、それによって「自分」は現代の一人称用法を持っている。また、「内的自己」という意味によって抽象的な動詞としか共起しないという特徴がある。

5.2 習得難易度の差の原因

以上の中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」に関する共時的研究と通時的研究を通じて、中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」は類似点が多いにもかかわらず、お互いに共起する動詞と語源が異なり、習得に影響を与えたと考えられる。両者の類似点と相違点をまとめると、以下のようになる。

- ① 両者の類似点
・長距離束縛

- ・主語指向性
 - ・次統制束縛
- ② 両者の相違点
- ・中国語“自己 (ziji)”は阻止効果が観察されたが、日本語「自分」は阻止効果がない。
 - ・日本語「自分」の照応形用法と共起する動詞は心理動詞、抽象的な動詞であり、中国語“自己 (ziji)”の照応形用法と共起する動詞は心理動詞、抽象的な動詞に限らず、具体的な動詞もある。
 - ・中国語の“自己 (ziji)”は古代漢語で再帰用法をもっていた“自 (zi)”と代名詞用法をもっていた“己 (ji)”とが塾合して成立した二音節語で、日本語の「自分」は和製漢語である。

中国語“自己 (ziji)”は日本語「自分」より使い方が複雑で、かつ中国語“自己 (ziji)”と共起する動詞は日本語「自分」より範囲が広い。よって、習得において、中国語“自己 (ziji)”のほうが日本語「自分」より難しいのではないかと考えられる。

6 まとめ

日本語母語話者に中国語を教えるとき、または日本語母語話者が中国語を学習するときに、中国語の“自己 (ziji)”の学習が難しいと感じる指導者と学習者は少ないだろう。同様に、中国語母語話者に日本語を教えるとき、そして、中国語母語話者が日本語を学習するときに、日本語の「自分」の学習が難しいと感じる指導者と学習者も少ないだろう。しかし、本研究の調査を通じて、日本語母語話者中国語学習者が上級レベルになった後でも、中国語の“自己 (ziji)”について正しく理解できていないということが分かった。一方、中国語母語話者日本語学習者の場合、学習レベルが上がるにつれ、日本語の「自分」を正しく理解できるようになるという結果を得た。両者の習得難易度の差の原因を探るため、中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」の類似点と相違点を明らかにしたうえ、共時的研究と通時的研究まで遡った。中国語“自己 (ziji)”の使い方が日本語「自分」より複雑であり、それぞれ共起する動詞も異なり、文全体の理解に影響を与えた。中国語“自己 (ziji)”と共起する動詞は日本語「自分」より範囲が広く、かつ使い方も複雑であるため、中国語“自己 (ziji)”のほうが日本語「自分」より習得が難しいと結論づけられた。

第二言語習得において、再帰代名詞の先行詞指向について文法書には書かれていなく、また習得の過程ではきちんとした指導を受けることがほぼない。したがって、中国語教育と日本語教育では、再帰代名詞の先行詞指向に説明を入れて指導した方がよいと考える。中国語“自己 (ziji)”と日本語「自分」が同一指標を付ける先行詞の条件を明確に説明することで、再帰代名詞への理解ミスの化石化が解決できると考える。

参考文献

- 程工 1999 「汉语“自己”一词的性质」 『当代语言学』 2、33-43.
- Chomsky, Noam. 1981 *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris Publications.
- 丁国钦 2007 「汉语“自己”一词的用法探源」 『外国语言文学』 4、229-233.
- 董秀芳 2002 「古汉语中的“自”和“己”-现代汉语“自己”的特殊性的来源」 『古汉语研究』 54: 69-75.

- 金晶 2014 「日中再帰代名詞の意味による研究」 『歴史文化社会論講座紀要』 11、25-39.
- 原口庄輔・中村捷編 1996 『チョムスキー理論辞典』 研究社出版.
- 久野暲 1973 『日本文法研究』 大修館.
- 孟琮・郑怀德・孟庆海・蔡文兰編 2012 『汉语动词用法词典』 商务印书馆出版.
- Thomas, Margaret. 1991 *Universal grammar and the interpretation of reflexives in a second language*. *Language* 67, 211-239.
- Thomas, Margaret. 1995 *Acquisition of the Japanese reflexives zibun and movement of anaphors in Logical Form*. *Second language Research* 11, 206-234.
- 吉永尚 2005 「「自分」と「自己 (ziji)」-照応の日中対照」 『そのだ語文』 1-11.
- Yuan, Boping. 1998 *Interpretation of binding and orientation of the Chinese reflexive ziji by English and Japanese speakers*. *Second Language Research* 14, 324-340.
- 曾莉 2012 「母语为英语的留学生对汉语反身代词的习得研究」 『华文教学与研究』 47、78-88.
- 翟勇 2019 「汉语反身代词的第二语言习得考察」 『静言論叢』 2、123-142.

语料库在线 (<http://corpus.zhonghuayuwen.org/>)

書き言葉均衡コーパス (コーパス開発センター) (https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/)

本研究の一部は、日本学術振興会科研費基盤研究(C)研究課題「照応表現第二言語習得研究-中国語・日本語・英語を中心に-」の補助を受けている。